

[原著論文]

語用論的資質を探究する歴史授業における 「学習としての評価」研究

——世界史単元「貨幣について考える」を事例にして——

宮本英征

要 約

本研究の目的は、語用論的資質を育成する歴史授業において、「学習としての評価」が学習者の資質を成長させる上で、効果的であることを明らかにする。そのため、世界史単元「貨幣について考える」の語用論的資質の探究構造と「学習としての評価」との関係性や評価方略を示し、実際の学習者の資質の成長を質的に検討した。本研究の意義は、「学習としての評価」を学習活動に積極的に位置付けることで、学習内容・経験を意識化させるだけではなく、学習者が自己と他者を区別する自己から、他者の存在を積極的肯定的に含みこむ自己へと転換し、さらに、他者と共に資質を修正し向上させるという市民的資質を育成できることを、明らかにしたことである。

キーワード：学習としての評価，市民的資質，語用論的資質，歴史教育，世界史教育

I 問題の所在

本研究の目的は、語用論的資質を育成する歴史授業において、「学習としての評価」が学習者の資質を成長させる上で、効果的であることを明らかにする。そのため、世界史単元「貨幣について考える」における語用論的資質の探究構造を解明し、「学習としての評価」の必要性を示す。そして、実際に学習者が評価活動によって成長させた資質について検討する。

「指導と評価の一体化」という言葉が学校教育において定着しているように、ブルームの形成的評価は日本の評価研究にも大きな影響を与えた。しかし、小テストの繰り返しなど学習者の到達度評価に留まることが多く、学習支援や改善につながらないことが批判された。また、教育評価論の分野では、これまでの形成的評価が教師の指導改善の手段として意味付けられてきたことを問い直し、学習者を主体とした学習改善を志向する「学習のための評価」が提案された。この評価で重視されたのが、評価のフィードバック方法及び学習者の評価参加による学びの意義の意識化（メタ認知化）である。特に、後者の視点を重視した評価論が「学習として

の評価」として注目されている。「学習としての評価」においては、評価規準に基づく自己評価や相互評価、評価規準の作成や改善などを通して、学習者が評価の主体となり、個々の達成度を評価する。そして、こうした一連の評価活動を「評価活動」ではなく「学習活動」として位置付ける（二宮、2015）。

社会科教育においては、高等専門学校を対象に、対話のための評価規準を作成することを公民系の授業内容に位置付けた研究がある（得居、2017）。この実践では、自分たちで作成した評価規準を念頭にした哲学対話とともに、協働的対話を促すコミュニティの形成が論じられた。

しかし、この研究において、学習者の対話のどのような資質が、どのように成長できたのかについては、明確にされていない。また、「学習としての評価」の学習者への影響を、質的に考察している研究そのものが少ない。そこで、本研究では、対話のための資質である語用論的資質を育成する歴史授業における「学習としての評価」の在り方とともに、学習者の資質への効果について明らかにする。そのため、Ⅱにおいて、本単元における語用論的資質の探究構造を明示し、「学習としての評価」との関係述べる。Ⅲでは、本単元の「学習としての評価」とともに、学習者の資質を把握する方略を示す。Ⅳで、学習者が成長させた語用論的資質を分析し、その特色を明らかにする。Ⅴにおいて、歴史教育における語用論的資質と「学習としての評価」の関係についてまとめる。

Ⅱ 世界史単元「貨幣について考える」における語用論的資質の探究構造

1. 貨幣に関する語用論的資質と学習内容

語用論的資質は、歴史を語る主体であることを学習者自身が自覚し、歴史について内省したり他の学習者や授業者と対話したりする資質であるといえる。本研究で開発・実践した世界史単元「貨幣について考える」は、貨幣を事実や知識としてだけでなく、言説として扱い、貨幣に関する語用論的資質を探究するものである（宮本、2018）。貨幣に関する語用論的資質の探究過程と学習内容を示したのが表1である。

学習者は貨幣の語りについて、第1段階：貨幣の機能そのものについての語り、第2段階：貨幣の社会的役割についての語り、第3段階：貨幣を使用する歴史的人物の目的に関する語り、第4段階：貨幣を使用する歴史的人物の価値観に関する語り、第5段階：貨幣を語る自己の価値観の自覚についての語り、第6段階：新しい貨幣についての自分自身の語り、のように段階的・向上的に探究する。また、学習者は貨幣の語り結びつく他者や自己の目的や価値観だけでなく、貨幣を語る主体について貨幣そのものから歴史的人物、そして、自己になるように探究する。学習者自身が貨幣を語る主体となることで、自分自身の貨幣のイメージを内省したり、他の学習者や授業者と貨幣の在り方について対話したりして、貨幣に関する語りについて自らの考えを修正・向上させる。

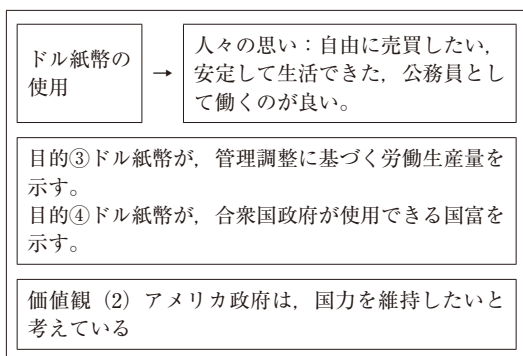
表1 貨幣に関する語用論的資質と学習内容

段階	貨幣に関する語用論的資質	学習内容																		
6	<p>◎私達が使用するお金には、多様な目的や価値観が、結びつくことを語るすることができる。</p> <p>◎自分がお金に結びつけていた歴史的価値観は、一つの価値観にすぎないことを自覚し語るすることができる。</p> <p>◎お金にどのような価値観を結びつけるのかを判断し、自分自身のお金の使い方について、語るすることができる。</p>	<p>◎時間通貨・地域通貨制度が、価値観(3)を形成する可能性があるかどうかを考える。地域通貨の使用によってコミュニケーションが形成され、貨幣が言説と同じ働きを担うことができることを検討する。そして、人々との関係から疎外された労働を克服するためには、目的⑤自分自身が決定管理した労働生産量と、目的⑥自分にとって必要な使用価値を示す、地域通貨のような機能を持つ貨幣を導入することで、他人のため、自分のための労働に従事し、自分自身の価値を貨幣以外に置くことができる可能性があるかを考える。</p> <table border="1" data-bbox="546 513 1189 877"> <tr> <td colspan="2" data-bbox="546 513 776 620">貨幣の使用・語り</td> <td colspan="2" data-bbox="776 513 1189 546">目的 労働を価値化する</td> </tr> <tr> <td colspan="2" data-bbox="546 620 776 716"></td> <td data-bbox="776 620 982 716">①自由競争に基づく</td> <td data-bbox="982 620 1189 716">③⑤管理・調整に基づく</td> </tr> <tr> <td data-bbox="546 716 650 877" rowspan="2">目的 富を象徴する</td> <td data-bbox="650 716 776 794">②④国家が使用する</td> <td data-bbox="776 716 982 794">価値観(1) 国家・政府が国力を増大したい。</td> <td data-bbox="982 716 1189 794">価値観(2) 国家・政府が国力を維持したい。</td> </tr> <tr> <td data-bbox="650 794 776 877">⑥個人が使用する</td> <td data-bbox="776 794 982 877">* (授業では理論上は存在するが、具体的な通貨としては不明であることに言及した。)</td> <td data-bbox="982 794 1189 877">価値観(3) 自分や他人が必要なお金のために働きたい。</td> </tr> </table>				貨幣の使用・語り		目的 労働を価値化する				①自由競争に基づく	③⑤管理・調整に基づく	目的 富を象徴する	②④国家が使用する	価値観(1) 国家・政府が国力を増大したい。	価値観(2) 国家・政府が国力を維持したい。	⑥個人が使用する	* (授業では理論上は存在するが、具体的な通貨としては不明であることに言及した。)	価値観(3) 自分や他人が必要なお金のために働きたい。
貨幣の使用・語り		目的 労働を価値化する																		
		①自由競争に基づく	③⑤管理・調整に基づく																	
目的 富を象徴する	②④国家が使用する	価値観(1) 国家・政府が国力を増大したい。	価値観(2) 国家・政府が国力を維持したい。																	
	⑥個人が使用する	* (授業では理論上は存在するが、具体的な通貨としては不明であることに言及した。)	価値観(3) 自分や他人が必要なお金のために働きたい。																	
5	<p>○私達は、お金について語る場合、国力を増加・維持したいという、国家・政府の歴史的価値観の影響を、受けていることを自覚し、語るすることができる。</p>	<p>○貨幣の発言・使用に関する価値構造の表をまとめ、私達が働いて貨幣を得たり、貨幣に言及する場合、価値観(1)(2)のような国力を増加・維持したい、国家・政府の価値観が、背景にあることを語るすることができる。</p> <table border="1" data-bbox="546 1010 1189 1224"> <tr> <td colspan="2" data-bbox="546 1010 776 1116">貨幣の使用・語り</td> <td colspan="2" data-bbox="776 1010 1189 1043">目的 労働を価値化する</td> </tr> <tr> <td colspan="2" data-bbox="546 1116 776 1213"></td> <td data-bbox="776 1116 982 1213">①自由競争に基づく</td> <td data-bbox="982 1116 1189 1213">③管理・調整に基づく</td> </tr> <tr> <td data-bbox="546 1213 650 1224">目的 富を象徴する</td> <td data-bbox="650 1213 776 1224">②④国家が使用する</td> <td data-bbox="776 1213 982 1224">価値観(1) 国家・政府が国力を増大したい。</td> <td data-bbox="982 1213 1189 1224">価値観(2) 国家・政府が国力を維持したい。</td> </tr> </table>				貨幣の使用・語り		目的 労働を価値化する				①自由競争に基づく	③管理・調整に基づく	目的 富を象徴する	②④国家が使用する	価値観(1) 国家・政府が国力を増大したい。	価値観(2) 国家・政府が国力を維持したい。			
貨幣の使用・語り		目的 労働を価値化する																		
		①自由競争に基づく	③管理・調整に基づく																	
目的 富を象徴する	②④国家が使用する	価値観(1) 国家・政府が国力を増大したい。	価値観(2) 国家・政府が国力を維持したい。																	
4	<p>・お金には、国力を増加・維持したいという、国家・政府の価値観が、結びついていることを、語るすることができる。</p>	<p>・目的①②には、価値観(1) イギリスの国富を増大させるために人々は働くべきだという国家・政府の価値観が結びついていることを語るすることができる。</p> <table border="1" data-bbox="546 1335 1189 1406"> <tr> <td data-bbox="546 1335 710 1406">ポンド金貨の使用</td> <td data-bbox="710 1335 1189 1406">→ 人々の思い：豊かになってよかった、あまり稼ぐことができなかった、貿易商がうらやましい。</td> </tr> </table> <table border="1" data-bbox="546 1425 1189 1497"> <tr> <td data-bbox="546 1425 1189 1497">目的①ポンド金貨が、自由競争に基づく労働生産量を示す。 目的②ポンド金貨が、英国政府が使用できる国富を示す。</td> </tr> </table> <table border="1" data-bbox="546 1516 1189 1549"> <tr> <td data-bbox="546 1516 1189 1549">価値観(1) イギリス政府は、国力を増大したいと考えている。</td> </tr> </table> <p>・目的③④には、価値観(2)国富を維持するために人々は働くべきだ、というアメリカ政府の価値観が、結びついていることを分析する。(表2)</p>				ポンド金貨の使用	→ 人々の思い：豊かになってよかった、あまり稼ぐことができなかった、貿易商がうらやましい。	目的①ポンド金貨が、自由競争に基づく労働生産量を示す。 目的②ポンド金貨が、英国政府が使用できる国富を示す。	価値観(1) イギリス政府は、国力を増大したいと考えている。											
ポンド金貨の使用	→ 人々の思い：豊かになってよかった、あまり稼ぐことができなかった、貿易商がうらやましい。																			
目的①ポンド金貨が、自由競争に基づく労働生産量を示す。 目的②ポンド金貨が、英国政府が使用できる国富を示す。																				
価値観(1) イギリス政府は、国力を増大したいと考えている。																				

3	<p>・お金には、人々の労働生産量と国家・政府が使用できる富を示すものにしてしようとする国家・政府の目的が結びついてあることを語るができる。</p>	<p>・イギリス金本位制でのポンド金貨の使用をシミュレーションする。豊かになってよかった、あまり稼ぐことができなかった、貿易商がうらやましい、などの感想の背景にある、ポンド金貨の使用には①自由競争に基づくイギリス人の労働生産力を価値化する目的が、あることを分析する。また、茶・砂糖・原綿などに交換できるポンド金貨の総額がイギリス全体の国富として言及されたように、②イギリスが使用できる富の象徴とする目的が、あったことを語るができる。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> ポンド金貨の使用 → 人々の思い：豊かになってよかった、あまり稼ぐことができなかった、貿易商がうらやましい。 </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> 目的①ポンド金貨が自由競争に基づく労働生産量を示す。 目的②ポンド金貨が英国政府が使用できる国富を示す。 </div> <p>・アメリカ管理通貨制度におけるドル紙幣の使用に関するシミュレーションを体験する。自由に売買したい、安定して生活できた、公務員として働くのが良い、などの感想の背景には、③調節・管理に基づくアメリカ国民の労働生産量を価値化する目的が、結びついたことを分析する。石油・ゴムなどに交換されるドル紙幣の総額がGDPのような国富とし言及されたことから、④アメリカが、使用できる国富を象徴する目的が結びついたことを語るができる。(表2)</p>
2	<p>・私達が貧富の差や社会・国家の豊かさを説明するためにお金を用いることについて語るができる。</p>	<p>・私達は、より多くの賃金を稼ぐことができるかどうかで、人の価値を判断してしまう場合があることや、私達は、生活するためにより多くの賃金を獲得するために働いていることなどを、語るができる。</p>
1	<p>・お金は物と物との交換や、対象となるものの価値、価値を保存するためなどに使用されていることを語るができる。</p>	<p>・私達が、より多く獲得したいと思う貨幣は、貨幣そのものに価値があるのではなく、物と物との交換や、対象となるものの価値、価値を保存するためなどに、使用されてきたことを語るができる。</p>

(筆者作成)

表2 ツールミン図式



(筆者作成)

表3 価値構造

貨幣の使用・語り		目的 労働の価値化	
		①自由競争に基づく	③⑤管理・調整に基づく
目的 富の象徴	②④国家が使用する	価値観 (1) 国家・政府が国力を増大したい。	価値観 (2) 国家・政府が国力を維持したい。
	⑥個人が使用する	*	価値観 (3) 自分や他人が必要なことのために働きたい。

(筆者作成)

各段階の貨幣に関する語用論的資質は、学習内容として具体化される。このため、学習内容は、学習者が段階的・向上的に探究できるように組織される。例えば、第3・4段階の語用論的資質は、表2のようなドル紙幣の使用に関するツールミン図式として、そして、第5・6段階

の語用論的資質は、表3のような貨幣の使用に関する価値構造として、それぞれ示される。価値構造は、トゥールミン図式の目的を枠組みとし、価値観を俯瞰的に構造化したものである。トゥールミン図式を段階的向上的に組織したものになっている。

この結果、本単元において、学習者はイギリスにおけるポンド金貨・金本位制度や、ドル紙幣・管理通貨制度などの事実や知識だけでなく、トゥールミン図式を用いて価値観を分析したり、貨幣の使用に関する価値構造を構築したりして、言説としての貨幣の語りを段階的に探究し、貨幣の在り方について自らの語りを構築する。そうすることで、学習者は、貨幣について自己との内省や他者との対話を進め、自らの貨幣の語りを修正・向上させていく。

2. 広島大学附属高等学校における実践

本単元は、2017年6月に広島大学附属高等学校の1年生（37名）に、世界史Aの投げ入れ単元として6時間で実践した。表4は本単元の実践概略と、表1の語用論的資質の探究段階を示したものである。単元は小単元1：「貨幣」とは何か、小単元2：イギリスの金本位制度におけるポンド金貨の使用、小単元3：アメリカの管理通貨制度におけるドル紙幣の使用、小単元4：時間通貨の使用、小単元5：評価活動で構成し、期末テストに本単元の最終アンケートを含めた。

1時間目は、40分の短縮授業で行った。小単元1を実施し、普段使用する貨幣の機能に興味を持たせ、学習者が認識している貨幣の働きを確認した。その後、事前アンケートを配布し、学習者が、貨幣の機能やそのあり方について、どのように思っているかを、記述させた。次に、語用論的資質に基づく評価規準を説明し、自身の回答を評価させた。この際、第6段階のように、貨幣について語る事が、本単元の目標であることを説明した。以上のような授業構成は、第1・2段階の語用論的資質を踏まえ、さらに高次の段階の資質を示すことで、探究する姿勢を形成するものになっている。2時間目は、小単元2を実施し、イギリス金本位制におけるポンド金貨の使用に関するシミュレーション1を、3回まで体験した。3時間目は、シミュレーション1の続きを行い、ポンド金貨使用の目的や結びつく価値観を分析した。小単元2の授業構成は、第3・4段階の語用論的資質を、探究するものになっている。4時間目は小単元3を実施し、アメリカ管理通貨制におけるドル紙幣の使用をシミュレーション2で体験させ、ドル紙幣使用の目的や結びつく価値観を分析した。ここでも、第3・4段階の語用論的資質を探究するものになっている。また、ここまでの学習のまとめとして、貨幣の発言・使用に関する価値構造の表を作成し、私達が働いて貨幣を得たり貨幣について言及したりする際、価値観(1)(2)国力を増加・維持したい国家・政府の意図が、背景にあることを考察した。このまとめは、学習者が第5段階の語用論的資質を探究し、歴史的価値観を自覚・語るものになっている。5時間目は小単元4を実施し、これまでの貨幣の働きと異なる地域通貨の使用を、シミュレーション3で体験させた。この体験から、価値観(3)の可能性や、自分自身の価値を貨幣以外に置くことができるかどうかを探究した。まとめとして、これまでの貨幣の使用や語りについて、結びつく価値観

を観点に考察した。そして、授業について感想を記述した。以上のような授業構成は、6段階の語用論的資質を探究し、学習者自身の貨幣の語りを、再構築するものになっている。6時間目は40分間に短縮して、小単元5の評価活動を実施した。最初に、前時に行った貨幣の使用・語りのまとめを復習した。そして、事後アンケートの評価問題を回答させた。次に、評価規準に当てはめ自己評価を行った。また、プリントを交換して相互評価を行った。最後にグループになって評価規準について話し合わせた。ここでは、改めて第6段階の語用論的資質を踏まえ、自分で内省したり、他の学習者・授業者と対話したりした。期末テストでは、最終アンケートを実施し、貨幣について最終的な言説を創った。

表4 単元「貨幣について考える」の概略

時程	学習内容	資料	探究の段階
第1限	<p>【小単元1：「貨幣」とは何か。】</p> <p>(1)私達は、より多くの賃金を稼ぐことができるかどうかで、人の価値を判断してしまう場合があることや、私達は生活するために、より多くの賃金を獲得するために働いていることなどに、気がつかせる。</p> <p>(2)私達が、より多く獲得したいと思う貨幣は、貨幣そのものに価値があるのではなく、物と物との交換や、対象となるものの価値、価値を保存するためなどに、使用されてきたことを理解する。</p> <p>(3)事前アンケートに回答し、自己評価する。</p> <p>(4)評価規準を説明し、本単元の目標として提示する。</p>	①	2 1
第2限	<p>【小単元2：イギリスの金本位制度におけるポンド金貨の使用】</p> <p>(1)産業革命が、進展する19世紀のイギリスは、アダム＝スミスに基づく自由貿易主義政策を行い、金本位制を実施したことを理解する。</p> <p>(2)シミュレーション1を3年目まで実施し、イギリスにおけるポンド金貨の使用を体験する。</p>	②	
第3限	<p>(1)シミュレーション1を4年目から6年目まで実施する。</p> <p>(2)各班が獲得した金貨の枚数を表に示し、個人個人が感想をトゥールミン図式に記入する。</p> <p>(3)ポンド金貨の使用には、①自由競争に基づくイギリス人の労働生産力を価値化する、目的があったことを分析する。また、②イギリスが使用できる富を象徴とする、目的があったことを分析する。</p> <p>(4)これらの目的には、価値観(1)イギリスの国富を増大させるために人々は働くべきだ、という国家・政府の価値観が、結びついていることを分析する。</p> <p>(5)「貨幣」の使用には、①自由競争に基づく国民の労働生産量を価値化し、②国家が使用できる富を象徴しようという目的が結びついている。これらの目的は価値観(1)国富を増大させるために人々は働くべきだ、という国家・政府の価値観に基づくものであることをまとめる。</p>		3 4 3・4
第4限	<p>【小単元3：アメリカの管理通貨制度におけるドル紙幣の使用】</p> <p>(1)20世紀のアメリカは、世界恐慌による貧富の差の拡大に対応して、ケインズの理論に基づきニューディール政策を行い、連邦準備委員会による管理通貨制度を実施したことを理解する。</p> <p>(2)シミュレーション2を4年目まで実施し、アメリカにおけるドル紙幣の使用を体験する。</p> <p>(3)各班が、獲得したドル紙幣の枚数を表に示し、個人個人が、感想をトゥールミン図式に記入する。</p> <p>(4)ドル紙幣には、③調節・管理に基づくアメリカ国民の労働生産量を価値化する目的が、結びついたことを分析する。また、④アメリカが使用できる国富を象徴する目的が、結びついたことを分析する。</p>	③	3

	<p>(5) これらの目的には、価値観 (2) 国富を維持するために人々は働くべきだ、というアメリカ政府の価値観が、結びついていることを分析する。</p> <p>(6) 「貨幣」の使用には、③調節・管理に基づいて国民の労働生産量を価値化し、④国家が使用できる富を象徴する目的が、結びついた。これら目的は価値観 (2) 国富を維持するために人々は働くべきだ、という国家・政府の価値観が、結びついていることをまとめる。</p> <p>(7) 貨幣の発言・使用に関する価値構造の表をまとめる。私達が働いて貨幣を得たり、貨幣に言及したりすることには、価値観 (1) (2) のような国力を増加・維持したい国家・政府の価値観が背景にあることに気がつく。</p>	4	3・4	5	
第5限	<p>【小単元4：地域通貨の使用】</p> <p>(1) 表を提示し、貨幣が国家・政府の価値観と結びついていることを再度確認する。</p> <p>(2) シミュレーション3を実施し、新しい働きをする時間通貨の使用を体験する。</p> <p>(3) 時間通貨以外にもアトム通貨を紹介し、地域通貨の特色を説明する。</p> <p>(4) 地域通貨が、価値観 (3) を形成する可能性があるかどうかを考える。地域通貨の使用によって、コミュニケーションが形成され、貨幣が言説と同じ働きを担うことができることを検討する。そして、人々との関係から疎外された労働を克服するためには、⑤自分自身が決定した労働生産量と、⑥自分にとって必要な使用価値を示すという目的が結びつく。地域通貨のような機能を持つ貨幣を導入することで、他人のため、自分のための労働に従事し、自分自身の価値を貨幣以外に置くことができる可能性があるか考えさせる。</p> <p>(5) 貨幣の使用や語りについて、次のようなまとめを行う。</p> <p>①お金は使うだけでなく私達が語るものである。②私達がお金を使ったり語ったりする場合、私達の行為は国家・政府の目的・価値観の影響を受けている場合がある。③貨幣の使用や発言において、私達が多様な国家・政府の目的・価値観（歴史的価値観）を結びつけることできる。④豊かな生活はお金の多寡によって考えることが一見普通であるが、そのような思いは誰かによってつくられた思いかもしれない。⑤地域通貨などの新しい貨幣の使用や発言によって、豊かな生活について、異なる見方ができないだろうか。</p> <p>(6) これまで受けた授業の感想をまとめる。(5分程度)</p>		④ ⑤	6	6
第6限	<p>【小単元5：評価活動】</p> <p>(1) 事後アンケート問いに回答する。</p> <p>(2) 評価規準に当てはめ自己評価を行う。</p> <p>(3) 交換して相互評価を行う。</p> <p>(4) グループになって評価規準について話し合う。</p>				6
期末	最終アンケートの実施				6

(筆者作成)

【資料】

①「あなたの値段はいくら？」(中央大学政策科学研究室監修『あなたの値段はいくら?』アミューズメントブックス 2000年) ②「シミュレーション1」, ③「シミュレーション2」, ④「シミュレーション3」については宮本(2018)を参照されたい。⑤「アトム通貨」(石渡正人「アトム通貨で描く地域コミュニティ」西部忠編『地域通貨』ミネルヴァ書房, 2013年, p. 227)

3. 本章のまとめ

本単元における探究構造は、次のように、まとめることができる。第1に、学習者は貨幣を事実や知識として扱うのではなく、言説として探究する。第2に、学習者は、貨幣に関する語用論的資質の段階性に基づく単元構成により、貨幣について語る資質を段階的に探究する。第3に、学習者は、貨幣使用に関するシミュレーション・ゲームを体験する学習内容により、貨幣使用の目的や結びつく価値観について繰り返し探究する。第4に、学習者は、事前・事後アンケートに回答したり、自己評価と相互評価という評価活動を行ったりして、自己や他者の貨

幣の語りを意識化する「学習としての評価」に基づく評価活動を行う。その結果、第5に、学習者は、貨幣に関する自己との内省や他者との対話を進め、互いの貨幣の語りを修正・向上させていく。

本単元は、貨幣に結びつく目的・価値観を分析したり構築したりしながら、貨幣に関する言説を各自が創り出す。そして、「学習としての評価」の評価活動を実施することで、貨幣使用に関する自分の言説を評価規準に基づいて内省するだけでなく、他の学習者と対話しながら、自分の言説を修正・向上させる。語用論的資質を育成する歴史授業において、「学習としての評価」は、創り出した言説を実際に使用したり改めて再構築したりする機会を保障する。そのため、学習活動に位置づくものといえる。

Ⅲ 本単元の評価方略

本単元の評価方略は、「学習としての評価」に基づく評価活動と共にその活動によって成長した資質を把握する評価活動から構成されている。

1. 評価計画

本単元は、貨幣に関する語用論的資質を、どのようにどこまで探究できたかを、学習者自身が意識化し対話を促す「学習としての学び」だけでなく、授業者が、学習者の探究した資質も把握できるように計画した。その評価計画が表5である。評価計画①は、小単元1終了時に事前アンケートに回答し、評価規準に基づいて自己評価する。学習者が、常識的に認識している貨幣の機能や働きを、自分自身で把握することができる。次に、②小単元4終了時に、授業の感想を記述する。感想の記述から、授業の印象や学習内容の定着を、把握することができる。授業者は、学習者の資質をより正確に評価するための参考とする。③小単元5において「学習としての評価」の活動を実施し、(a) 事後アンケートへの回答、(b) 自己評価の実施、(c) 相互評価の実施、(d) 評価規準の検討を行う。授業者は事前・事後アンケートを比べることで、どのようにどこまで達成できたかを評価できる。また、学習者は、自己評価を行うことで、自分自身が達成した資質を把握できる。そして、他者と評価し合ったり、評価規準そのものを検討する活動を通して、貨幣に関する自分の語りを相対化したり、新しい語りを構築したりできる。④期末テストでは、事後アンケートと同じ評価問題を、最終アンケートとして回答する。授業者は、事後アンケートの評価活動によって、学習者が貨幣に関する資質を、どのようにどこまで再構築できたかを、把握する。

このように評価活動を計画するのは、「学習としての評価」によって、学習者が貨幣に関する語用論的資質を、どのようにどこまで探究できたかを意識化し、学習者と学習者、学習者と授業者が、共に対話することで、より深く語用論的資質を学ぶ姿勢を、創り出すためである。

また、学習者が育成した資質を、授業者が把握することで、より良い授業へと改善することを、志向しているためである。

表5 評価計画

- | |
|--|
| <p>①小単元1終了時に事前アンケートに回答し、自己評価を実施。</p> <p>②小単元4終了時に授業について感想を記述する。</p> <p>③小単元5において評価活動を実施。
 (a) 事後アンケートを実施。(b) 自己評価を実施。(c) 相互評価を実施。
 (d) 評価規準の検討を実施。</p> <p>④期末テストで最終アンケートを実施。</p> |
|--|

(筆者作成)

2. 評価問題の実際

貨幣に関する語用論的資質の達成度を把握するために、表6の事前アンケート、表7の小単元4終了直後の感想、表8の事後アンケート、表9の期末テストの最終アンケートを組織した。事前アンケートは2枚で構成した。1枚目の問1・問2は単元テーマに基づいて、問1で貨幣の機能や働き、問2で学習者にとっての貨幣のイメージを回答させた。二つの問の回答を分析することで、学習者が常識的に持っている貨幣の認識をより正確に把握することができる。2枚目には評価規準を公開し、1枚目の回答を自己評価させるとともに、本単元の目標を提示する。

小単元4終了直後の感想は、学習者の記述から授業の印象や学習内容の定着を把握することができ、授業者が学習者の資質をより正確に評価するための参考にする。

事後アンケートは2枚で構成した。1枚目の問1は、事前アンケート問2と同じ設問とし、比較しやすくした。また、問2は地域通貨のイメージを記述させることで、学習者自身が、どのような貨幣を使用すべきかについて、判断できるようにした。2枚目は事前アンケートと同様に評価規準を公開し、自己評価や相互評価、評価規準そのものを検討できるようにした。

期末テストの最終アンケート問1・問2は、事後アンケート問1・問2と同じ設問とした。事後アンケートの「学習としての評価」が、深く学ぶ姿勢を形成し、貨幣の語用論的資質をどのようにどこまで達成できたかを、把握する。また、問3は評価活動の感想を記述させる。学習者が、評価活動により、どのような姿勢を形成できたかを、資質の達成度を踏まえて、より詳細に把握できる。

表6 事前アンケート

- | |
|--|
| <p>(1枚目)</p> <p>問1 あなたは「お金」にはどのような働きがあると考えていますか。また、そのような働きを「お金」がもつと考えた理由も教えてください。(「お金の働き」と「理由」を区別して記述)</p> <p>問2 「お金」とはあなたにとってどのような存在か教えてください。また、なぜ、そう思ったか教えてください。(「存在」と「理由」を区別して記述)</p> |
|--|

(2枚目)

*表10の評価規準を提示

【上の評価規準に基づいて、アンケート問1・問2の回答を自分で評価してみよう】

問1 評価とその根拠。問2 評価とその根拠。

(筆者作成)

表7 小単元4終了直後の感想

これまでの「貨幣」についての授業を受けて、感想を書いてください。

(筆者作成)

表8 事後アンケート

(1枚目)

問1 授業を受けて、お金とはどのような存在だと考えたか。授業者のまとめをどのように思ったか。

問2 価値観③、目的③⑥のような働きをする地域通貨についてどのように考えたか。

(2枚目)

*表10の評価規準を提示

【上の評価規準に基づいて、アンケート問1・問2の回答を自分で評価してみよう。】

問1 評価とその根拠。問2 評価とその根拠。

【他の人に評価してもらおう。】

問1 評価とその根拠。問2 評価とその根拠。

【班で考えよう】

問 授業者が示した評価規準をより良い規準にする場合、どのように改善したら良いだろうか。また、評価「7」「8」などより高い規準を考えてみよう。

(筆者作成)

表9 期末テストの最終アンケート

問1 授業を受けて、お金とはどのような存在だと考えたか。授業者のまとめをどのように思ったか。

問2 価値観③、目的③⑥のような働きをする地域通貨についてどのように考えたか。

問3 授業では、問1・問2の回答を自分で評価したり、友人に評価したりしてもらいました。また、自分たちで評価規準についても考えました。このように自分自身で評価活動を行ってみた感想を書いてください。

(筆者作成)

3. 評価規準

各設問の回答は、表10の評価規準に基づいて学習者や授業者が評価付けする。評価規準は表1で示した貨幣に関する語用論的資質の内容を評価規準とし、その段階性が評価となる。そのため、本単元の評価規準は、語用論的資質を段階的向上的に把握し評価する。

評価規準は学習者による自己評価や相互評価においては、自分の語りを内省したり対話したりする規準となる。また、評価規準の検討は、これまでの語りを相対化し深く学ぶ姿勢を創り

表10 評価規準

規準の内容	評価
◎私達が、お金について多様な目的や価値観を結びつけて語ることを、尊重できている。 ◎自分が、お金の結びつけていた歴史的価値観は、一つの価値観にすぎないことを、自覚できている。 ◎お金のどのような価値観を結びつけるか判断し、自分自身のお金の使い方について、説明できている。	6
○私達は、お金について語る場合、国力を増加・維持したいという、国家・政府の歴史的価値観の影響を受けていることを、自覚できている。	5
・私達が、語るお金には、国力を増加・維持したいという、国家・政府の価値観が、結びついていることを、分析できている。	4
・私達が、語るお金には、お金の、人々の労働生産量と国家・政府が使用できる富を示すものにしてしようとする、国家・政府の目的が、結びついていることを分析できている。	3
・私達が、貧富の差や社会・国家の豊かさを説明するために、お金について語ることを、分析できている。	2
・お金は物と物との交換や、対象となるものの価値、価値を保存するためなどに使用されていることを、説明できている。	1
・評価規準にどれも当てはまらない。・分からない。記述なし。	0

(筆者作成)

出す土台となる。評価規準は「学習としての評価」に基づく評価活動の中心的な対象となる。

4. 評価構造

表11は、授業者が、評価問題・感想における記述を言説分析し評価付けるために、本単元の評価問題・感想の関係を、構造化して示している。言説分析は、三つの視点で行う。分析(1)では、事前、事後、最終の各アンケートの総合評価を提示し、資質の探究過程を把握するものである。すなわち、①事前1の評価付けと、事前2の評価付けを比べて、事前アンケートにおける学習者の資質を、総合的に評価付ける。②事後1の評価付けと、事後2の評価付けを比べて、事後アンケートにおける学習者の資質を、総合的に評価付ける。適宜、授業直後の感想も参照する。③最終1の評価付けと最終2の評価付けを比べて、最終アンケートにおける学習者の資質を、総合的に評価付ける。分析(2)では、同じ設問を比較することで、資質の変化を詳細に分析する。すなわち、①事前2—事後1—最終1の言説分析、②事後2—最終2の言説分析である。分析(3)は評価規準そのものの検討と、評価活動の感想から、学ぶ姿勢について示す。

評価構造の各回答は、表10の評価規準に基づいて、学習者の回答を言説分析し、評価付ける。そのため、事前に数人の学習者の回答を、事例として当てはめたものを、表12として示した。表には、学習者の回答を、評価規準に基づいて評価付けする際に着目した箇所を、下線部を引いている。例えば、最終1評価6に位置づく学習者の回答「私は初めお金はただ価値を保存す

る存在にしかすぎないと考えていたが、授業を受けて、お金は国家、政府の目的や価値観の影響など、様々な影響をうけており、さらに自分という立場、国家という立場など、様々な視点から見る事が可能な存在だと考えられるようになった。お金は「語るもの」という概念は私には無かったため面白いと思った。しかし、授業を振り返ると、私達は知らず知らずのうちにお金を語っていることに気づいた。まとめの4つ目は本当にその通りと思う」では下線部に着目し、評価6の評価規準「◎私達が、使用するお金は、多様な目的や価値観を結びつけて語れることを、尊重できている」に当てはまると判断し、評価6に位置づけた。

このように評価規準に基づく事例的な評価付けを示すことで、学習者の回答の評価付けの客観性を高め、より正確に学習者の資質の探究過程を把握できる。

表11 授業者による評価構造

事前		事後		最終		感想	言説分析
1	【回答】						
自己評価	【回答】						
2	【回答】	1	【回答】	1	【回答】	②評価活動の感想	分析(2) ①事前2—事後1—最終1の言説分析 ②事後2—最終2の言説分析 分析(3) ①規準反省の言説分析 ②評価活動の感想
自己評価	【回答】	自己評価	【回答】				
		相互評価	【回答】				
		2	【回答】	2	【回答】		
		自己評価	【回答】				
		相互評価	【回答】				
		規準反省	【回答】				

(筆者作成)

表12 評価規準に基づく事例的な評価付け

	評価規準	事前1	事前2(事後1, 最終1)	事後2(最終2)
6	◎私達が使用するお金は、多様な目的や価値観を結びつけて語れることを尊重できている。	該当する回答無し。	私は初めお金はただ価値を保存する存在にしかすぎないと考えていたが、授業を受けて、 <u>お金は国家、政府の目的や価値観の影響など、様々な影響をうけており、さらに自分という立場、国家という立場など、様々な視点から見る事が可能な存在だと考えられるようになった。</u> お金は「語るもの」という概念は私には無かったため面白いと思った。しかし、授業を振り返ると、私達は知らず知らずのうちにお金を語っていることに気づいた。まとめの4つ目は本当にその通りと思う。	自分たちが必要なものに対して使用していると思っていても結果的には <u>国力の維持につながっていることから、私達が国家・政府がどのようなことを目的としているのか、また、各地域でお金の価値がどのように違っているのかを考察することができる。</u> それによって自分たちの生活が誰によってつくり出されているのか考察することができる

語用論的資質を探究する歴史授業における「学習としての評価」研究

<p>◎自分がお金に結びつけていた歴史的価値観は一つの価値観にすぎないことを自覚できている。</p>	<p>該当する回答無し。</p>	<p>お金は政府や国家の目的を結びつけて考えることができ、そこに隠された歴史的な背景について学ぶことも大切だと思った。私は今まで、お金はたくさんあればあるほど自由で豊かな生活ができるものだと思っていたが、それはある一つの見方に過ぎず、様々な観点から、「豊かな生活」と「お金」を結びつけて考えることで、これまでの考えとは違った見方ができると思った。</p>	<p>地域通貨はその地域に住む人々が必要とするために生まれるものなので、おのずと地域の人々とコミュニケーションする機会ができて、交流の場が増え、地域の活性化にもつながっていて良いと思う。日本にももっと取り入れるべきだと思う。</p>
<p>◎お金にどのような価値観を結びつけるか判断し、自分自身のお金の使い方について説明できている。</p>	<p>該当する回答無し。</p>	<p>授業を受ける前は、お金は物の価値をあらわす働きしかないと考えていたけれど、授業を通して国家・政府によって管理されており、国力の増大、維持に関わっているものだと思った。また、国家だけではなく個人が自分・他者を考慮して使用できるものであり、また各地域の歴史を表しているものでもあった。</p>	<p>私は地域通貨は一般化されている「富」ではなく、人を存在としての「富」と考え改めることができ、自分達が自由に、そこに価値規準をうみだせる、という点では良いと感じた。しかし、使い方、つくられ方によっては、人を洗脳状態にもっていく(まとめの4つ目にあたる)ものでこわいと感じた。ゲームマネーをゲームの中のみでその存在を考えたとき、この良いいれいとなると思う。</p>
<p>5 ○私達はお金について語る場合、国力を増加・維持したいという国家・政府の歴史的価値観の影響を受けていることを自覚できている。</p>	<p>該当する回答無し。</p>	<p>お金がないと生活できないと思っている時点で政府の思惑にはまっている。</p>	<p>お金とはただ私達を使うだけではなく、政府・国家の設定した目的が具体化されたものであることが分かった。お金は物と物の交換という役割があるが、食べ物など、それがないと生きていけないというような物もお金と交換するようになり、私達はお金がないと生きていけないと考えるようになった。その点で、私達は政府の思惑にはまっているといえるだろう。</p>
<p>4 ・お金には、国力を増加・維持したいという国家・政府の価値観が結びついていることを分析できている。</p>	<p>該当する回答無し。</p>	<p>お金は使用することで国家や政府の目的や価値観と結びつけることができる存在。まとめは納得できました。</p>	<p>地域通貨は私にとっては制度が難しく理解しにくかった。でも、価値観の必要なことのために働くという価値観はいいと思った。(自分が必要なものに価値を見出して、それを交換して働くこと、と解釈した。</p>
<p>3 ・お金には、お金が人々の労働生産量と国家・政府が使用できる富を示すものにしてしようとする国家・政府の目的が結びついていることを分析できている。</p>	<p>該当する回答無し。</p>	<p>国家など様々なものに働いており、国家が使用した場合は管理、個人の場合は周囲からの認識のされ方というように、時と場合によって役割が変わる存在だと思った。授業者のまとめはその通りだと思った。</p>	<p>自分が一生懸命になっても実際は管理されていたというようなことを知って、面白いと思った。最初、お金は物の価値を表すものとしかとらえていなかったが様々な目的によって流通しているんだなと思った。限られた場所のみでしか流通していないので、いつか不便が生じるかなと思った。</p>
<p>2 ・私達が貧富の差や社会・国家の豊かさを説明するためにお金について語ることを分析できている。</p>	<p>(働き)人の価値を表してしまう。(理由)年取によってその人がどれくらいすごいのかという価値付けに直結している。</p>	<p>やっぱりお金は売買をするため、国にとっては国力や資金など重大な役割を持つものかもしれないけれど、個人にとっては、価値をはかるものであり、財産ともいえる存在だと思う。</p>	<p>該当する回答無し。</p>

1	・お金は物と物との交換や、対象となるものの価値、価値を保存するためなどに使用されていることを説明できている。	(働き) <u>対象の価値を表す働き</u> 、保存する働き。(理由) <u>新たな道具をつくり、それに共通の価値の認識をつくりあげれば保存でき、交換できる</u>	【存在】多ければ多いほどいい。 【理由】 <u>少なかったら生命を維持できなくなるかもしれないけど、多くてもたくさんを使い道があるため困らないから。</u>	自分がイベントに参加したり、ボランティアをして、地域に貢献して得たお金で自分のほしいものを、その地域のお店で買うという地域通貨はとても良いと負った。
0	・記述なし。感覚的。授業内容と無関係。	(働き) <u>人を縛りつつも、人に夢を与えるもの</u> 。(理由) 記述なし。	良いことも、悪い事も起こりうる 事の発端	確かに、国や地域同士で通貨が同じだったら、その通貨の流通も増え経済活動も盛んになるかもしれないが、そうしたら、その国や地域間での貧富の差が拡大してしまう恐れもあるので、1長1短あるなと思った。

(筆者作成)

5. 本章のまとめ

本章では、本単元の評価方略として、次のことを明らかにした。1つには、「学習としての評価」を導入するだけでなく、成長した語用論的資質を、授業者が、把握するように計画している。2つには、「学習としての評価」として、評価規準に基づく自己評価、相互評価、評価規準そのものの検討という、評価活動を組織している。3つには、授業者は事前アンケート、事後アンケート、最終アンケートにおいて、貨幣に関する語用論的資質を、評価規準に基づいて段階的に評価付けする。4つには、授業者が評価付けする際には、事前アンケート、事後アンケート、最終アンケートの各設問における言説分析の結果を、アンケートごとに総合的な評価付けを行う。また、各アンケートの同じ評価問題を比較する言説分析を行い、より詳細な資質の成長を把握する。さらに、評価規準の検討や評価活動について感想を言説分析し、学ぶ姿勢の特色を明らかにする。5つには、授業者の評価付けのために、事例的な評価付けを行い、評価の客観性・妥当性を高める。

このような評価方略を組織するのは、第1に、語用論的資質の探究構造が、歴史を語る主体としての自己を自覚し、他者との対話を繰り返すことで、段階的に探究していくものになっているからである。第2に、探究した語用論的資質は、自己と他者の関係を、他者の存在を積極的肯定的に含みこむ自己としての存在へと転回し、互いの考えを修正・向上させていく関係へと再構築する資質と考えているためである。第3に、語用論的資質を探究するということが、現時点で達成している資質を、学習者と授業者相互が把握し、次の段階には何が必要で、何をなすべきか、あるいは、どのような支援が有効であるかのように深く学ぶ姿勢を形成することと考えているためである。また、学習者と学習者、学習者と授業者が協力して、その姿勢を形成していくものとしているためである。

IV 学習者の探究過程の実際

1. 評価付けの量的分析

表13と表14は、「学習としての評価」に基づく学習者による評価活動の結果を、表15は、授業者による評価付けを示した。評価活動を行ったのは37人である。

表13は、学習者が自分の回答を評価規準に基づいて、評価付けした結果である。事前アンケートでは、81%の学習者が、評価1・2の段階に位置付けていたが、事後アンケートでは、評価1・2に位置付くとした学習者は、2.7%に激減し、変わって貨幣に結びつく価値観を、分析できた評価4が、最も多い35.5%、次いで、価値観の影響を自覚できた評価5が、27.0%、また、評価6に位置付くとした学習者が、16.2%いた。

表14は事後アンケートにおける学習者相互の評価付けの結果である。最も多かったのが評価6で37.8%、次いで評価5の24.3%、評価4は21.6%であった。このため、自己評価において、学習者は、上位の規準を視野に入れ厳しく、あるいは、謙遜して評価する傾向がある。一方、相互評価では、評価規準相応に、あるいは、相手に配慮して評価する傾向がある。

表15は、授業者による評価付けの結果を示したものである。授業者の評価付けでは、事前アンケートでは、評価1が70.2%を占め、評価3以上に位置付く学習者はいない。このことから、自己評価の際に、学習者は、評価規準を曖昧に判断したか、評価規準を当てはめることに不慣れで、難しかったと考えられる。事後アンケートでは、評価6に位置付く学習者は、35.1%であり、相互評価の割合とほぼ同じであった。しかし、授業者の評価付けした、評価4・5に位置付く学習者の割合は、自己・相互評価の場合に比べて、かなり少ない。一方で、授業者が、評価0に位置付けた学習者が、24.3%であるのに対し、自己・相互評価ではほとんどいない。学習者にとって評価規準4・5に基づいて評価することが、特に難しかった可能性がある。最終アンケートでは、半数以上の学習者が、評価6に位置付き、事後アンケートの「学習としての評価」が、効果的だったことが分かる。

表13 自己評価

	事前(%)	事後(%)
6	1 (2.7)	6 (16.2)
5	2 (5.4)	10 (27.0)
4	1 (2.7)	13 (35.1)
3	1 (2.7)	5 (13.5)
2	13 (35.1)	1 (2.7)
1	17 (45.9)	0 (0)
0	2 (5.4)	1 (2.7)
無	0 (0)	1 (2.7)

(筆者作成)

表14 相互評価

	事後(%)
6	14 (37.8)
5	9 (24.3)
4	8 (21.6)
3	3 (8.1)
2	2 (5.4)
1	1 (2.7)
0	0
無	0

(筆者作成)

表15 授業者による評価

	事前(%)	事後(%)	最終(%)
6	0 (0)	13 (35.1)	21 (56.8)
5	0 (0)	3 (8.1)	8 (21.6)
4	0 (0)	5 (13.5)	4 (10.8)
3	0 (0)	4 (10.8)	3 (8.1)
2	8 (21.6)	2 (5.4)	0 (0)
1	26 (70.2)	2 (5.4)	1 (2.7)
0	3 (8.1)	9 (24.3)	1 (2.7)
無	0 (0)	0 (0)	1 (2.7)

(筆者作成)

2. 授業者による語用論的資質の質的分析

授業者は、学習者の回答を三つの視点で言説分析を行い、評価付けた。分析(1)では評価基準に基づいて事前アンケート、事後アンケート、最終アンケートにおける学習者の回答を総合的に評価付け、学習者が「学習としての評価」、特に事後アンケートにおける評価活動で、どのようにどのくらい貨幣についての語用論的資質を探究できたかを、最終アンケートを言説分析することで示した。分析(2)では、同じ設問の回答を比較し、言説分析することで、より詳細に、「学習としての評価」に基づく評価活動の効果を把握した。言説分析における「①の評価」は、事前2—事後1—最終1のそれぞれの評価を意味する。また、「②の評価」は、事後2—最終2それぞれの評価を意味する。分析(3)では、評価基準の検討及び自己・相互評価による評価活動の感想を、言説分析する。そうすることで、「学習としての評価」によって、学習者の学びの姿勢が、どのくらい深まったのかを検討した。

(1) 段階的に資質を探究した学習者の事例(学習者A, 1-3-6)

事前一事後—最終の3回の評価付けにおいて、総合評価が1, 3, 6や2, 5, 6のように、事後アンケートにおける評価活動によって、段階的に資質を探究した学習者は、7人いた。表16は、総合評価1, 3, 6の学習者Aの回答を、示したものである。

分析(1)では、事前1「価値を表す働き、保存する働き」と記述しており、評価1。事前2では、「衣食住に関するものをお金で買う」とあり交換機能を踏まえている。評価1。総合評価1。事後1の「個人の場合は周囲からの認識のされ方」の意味は分からない。「国家が使用した場合は管理」という記述は、授業直後の感想に「自分たちが稼いでいるということは結果的に国力の増加や維持につながっている」とあることから、国家が国力を増大・維持させるように、労働を「管理」しているという、目的段階について記述していると、考えることができる。また、「時と場合によって役割が変わる存在」と、目的段階の多様性まで探究できた。評価3。事後2では、「自分が一生懸命になっても実際は管理されていた」とあり、地域通貨も一定のルールで、労働が価値化されていると考えている。また、「様々な目的によって流通しているんだなと思った」とあり、地域通貨に結びつく目的の多様性を、探究している。一方で、地域通貨については、「流通」を視点にして、「いつか不便が生じるかなと思った」と判断している。価値観の具体的な説明は不十分であるが、目的段階の探究によって、多様性を認識している。評価3。総合評価3。一方で、最終1では、「国力の増大」など、歴史的価値観を踏まえるだけでなく、「国家だけではなく個人が自分・他者を考慮して使用できる」「各地域の歴史を表す」など、新しい価値観の段階まで探究できた。評価6。最終2では、地域通貨について、「私達が国家・政府がどのようなことを目的としているのか」のように、これまでの貨幣の使用を相対化した。さらに、「各地域でお金の価値がどのように違っているのかを考えることができる」と、地域(人々)の独自性や「自分たちの生活が誰によってつくられているのか考えることができ

表16 学習者Aの回答 (1-3-6)

事前	事後	最終	感想
1 (働き) 対象の価値を表す働き、保存する働き。(理由) 新たな道具をつくり、それに共通の価値の認識をつくりあげれば保存でき、交換できる。			①とても面白かった。今までお金のやりとりをあまりしたことがなくて深く考えたことがなかったので、良い機会になった。 <u>自分たちが稼いでいるということは結果的に国力の増加や維持につながっている</u> と知って感心した。また、年々稼ぎが少なくなると生産意欲が少なくなったり、その逆も起こることが面白かった。こうして、格差が広がっていくんだなと思った。 ②自分が思っていたよりも内容が深く驚いた。お金と歴史的価値観を結びつけることが難しく苦労した。評価によって「 <u>私達が</u> 」 <u>自分自身で考えることが重要だ</u> ということがよく分かり、お金の価値基準は国家、政府の目的や意志によって <u>どのよう</u> に変化するものか、 <u>もっと知りたい</u> と思った。
自己評価 1。物々交換にとって換わるものとして考えていたから。			
2 【存在】生きるために必要なもの。 【理由】衣食住に関するものをお金で買うことができる。	1 国家など様々なものに働いており、 <u>国家が使用した場合は管理、個人の場合は周囲からの認識のされ方</u> というように、 <u>時と場合によって役割が変わる存在</u> だと思った。授業者のまとはその通りだと思った。	1 授業を受ける前は、お金は物の価値をあらわす働きしかないと思っていたけれど、授業を通して <u>国家・政府によって管理</u> されているものだと思った。また、 <u>国家だけではなく個人が自分・他者を考慮して使用</u> できるものであり、また <u>各地域の歴史</u> を表しているものでもあると思った。	
自己評価 1 記述なし。	自己評価 3。国家が関連しており、それは富を増やすためだということを考えていた。		
	相互評価 4。富と国家が関連している。		
	2 自分が一生懸命になっても <u>実際は管理</u> されていたというようなことを知って、面白いなと思った。最初、お金は物の価値を表すものとしかとらえていなかったが様々な目的によって <u>流通している</u> んだなと思った。 <u>限られた場所のみでしか流通していないので、いつか不便が生じるかな</u> と思った。	2 自分たちが必要なものに対して使用していると思っても結果的には <u>国力の維持</u> につながっていることから、 <u>私達が国家・政府がどのよう</u> なことを目的としているのか、また、 <u>各地域でお金の価値がどのよう</u> に違っているのかを <u>考える</u> ことができる。それによって <u>自分たちの生活が誰によって</u> つくられているのか <u>考える</u> ことができる。	
	自己評価 3。管理されているということを考えていた。		
	相互評価 3。管理について考えている。		
	規準反省 思いつきませんでした。		

(筆者作成)

る」のように、貨幣を通して自分と社会が結びつき社会を形成できることを、自分なりに探究し判断している。評価6。総合評価6。

分析(2)では、①の評価は1, 3, 6。事前2では、交換機能に基づく記述であったが、事後1では、国家が(国力を増大・維持させるように)労働を「管理」しているという目的を踏まえ、さらに、最終1では、貨幣の使用において、「国力の増大、維持」という国家の価値観を理解し、

国家が主体となることだけでなく、個人が主体となれると、探究できた。②の評価は3, 6。事後では、地域通貨に結びつく目的とその多様性を、評価しているが、流通範囲が狭い、という留保を行った。一方最終2では、地域通貨を使用することで、普段使う貨幣や各地域の貨幣の働きを、相対化するだけでなく、社会の創られ方としても、相対化して探究している。

分析(3)では、評価規準について、検討することは難しかった。感想でも、評価規準に結びつけて、評価する難しさを感じている。しかし、「私達が」自分自身で考えることが重要だ」と、評価活動によって、自分自身で考えることが重要だということ認識している。貨幣の使用の主体が自分自身であり、それ故に、「どのように変化するものか、もっと知りたい」のように、貨幣に結びつく目的・価値観について深く学ぼうとする姿勢を形成している。

学習者Aのように段階的に資質を探究している場合、事後アンケートで行う「学習としての評価」活動によって、自己との内省や他者との対話、評価規準の検討を通して、より高い資質を達成しようとする姿勢を、形成する場合が多い。最終アンケートでは、事後アンケートの資質を自ら成長させ、より高次の段階の貨幣についての語りを創る。

(2) 事後-最終で探究段階が同じ学習者の事例(学習者B, 1-6-6)

総合評価が1, 6, 6や0, 4, 4のように、事後-最終で評価が同じであった学習者は、14人いた。表17は、総合評価1, 6, 6の学習者Bの回答を示した。

分析(1)では、事前1「一般的な価値を一つのもので統一してあらわされる」とあり、対象となるものの価値を説明している。評価1。事前2「お金がないと生きられない」であり、感覚的。評価0。総合評価1。事後1「上層階級の人たち(個人)は国家、政府の目的、価値観の影響をうけていると思うが、普通階級の人たちはあまり、うけていないと思う」のように、国家政府の目的・価値観を踏まえながら、普通階級など独自の語りを探究できた。評価6。事後2「私は地域通貨は良いと思うのと同時に洗脳のようにこわいなとも思う。ある一定の価値観(一部の人によって創造された)を一定の区域のみか、そこでしか使えないという特別だというもので持っていると思う」のように、地域通貨に結びつく価値観自体を相対化する探究を行った。評価6。総合評価6。最終1では「お金は国家、政府の目的や価値観の影響など、様々な影響をうけており、さらに自分という立場、国家という立場など、様々な視点から見ることが可能な存在だと考えられるようになった」と、多様な価値観を尊重する資質だけでなく、「授業を振り返ると、私達は知らず知らずのうちにお金を語っていることに気づいた」のように、影響を受けていることまで探究している。評価6。最終2「人を存在としての「富」と考え改めることができ、私達が自由に、そこに価値規準をうみだせる」は、人は貨幣に結びつける価値規準を自由につくることができる、という意味だと判断した。地域通貨に結びつく目的や価値観を探究し、自分なりに語っている。また、「しかし、使い方、つくられ方によっては、人を洗脳状態にもっていく(まとめの4つ目にあたる)ものでこわいと感じた」と、地域通貨に結びつく価値観自体も相対化できた。評価6。総合評価6。

表17 学習者Bの回答 (1-6-6)

事前アンケート		事後アンケート		最終アンケート		感想
1	(働き) けんかをおこさない。(理由) 物々交換だとけんかになるから。 <u>一般的な価値を一つのもので統一してあらわされるから。</u>					①国力が増大していく仕組みが目に見える形になって面白かった。けど、私達がよく使うお金は自分のためのようで結局は国のためだったのは違和感があった。もう一つのお金の方はよく分らなかった。②自分を見つめ直す、さらに評価する機会は日常にはないので、 <u>自分の考えの浅はかさを知る機会</u> となってよかったです。日常的に私達が使い「普通」と感じている存在に対して疑問を抱くという作業は、その存在の <u>真の目的や価値観を深く考えることができるので、大切に手段として</u> もっておこうと思った。
自己評価	4. お金の働きはけんかをおこさないことだと思った。けんかが起きたら、国力が増加、維持できないから。					
2	【存在】命と同等の価値。命→お金×、お金→命○【理由】 <u>お金がないと生きれないから。</u>	1	<u>上層階級の人たち(個人)は国家、政府の目的、価値観の影響をうけていると思うが、普通階級の人たちはあまり、うけていないと思う。</u> 理由は国家が国力を増やそうと大企業に働きかけても、そこで従業している人たちはその企業に従い、企業は富の分配をおこなわず、会社にためたり、上層だけが裕福になっていく状態だと思うから。	1	私は初めお金はただ価値を保存する存在にしかすぎないと考えていたが、授業を受けて、 <u>お金は国家、政府の目的や価値観の影響など、様々な影響をうけており、さらに自分という立場、国家という立場など、様々な視点から見る事が可能な存在だと考えられるようになった。</u> お金は「語るもの」という概念は私には無かったため面白いと思った。しかし、授業を振り返ると、 <u>私達は知らず知らずのうちにお金を語っていることに気づいた。</u> まとめの4つ目は本当にその通りと思う。	
自己評価	0. 命と同等だと思ったから。	自己評価	0. 国家、政府の目的、価値観の影響について意見は述べているが、お金の存在については意見がないから。			
		相互評価	5. 国力を維持したい国の思惑と、その影響を受けている人々、そうでない人々との関連性について理解できている。			
		2	人によって見方は異なると思うが、 <u>私は地域通貨は良いと思うのと同時に洗脳のようにこわいなとも思う。</u> ある一定の価値観(一部の人のによって創造された)を一定の区域のみか、 <u>そこでしか使えないという特別だというもので持っていると思う。</u>	2	私は地域通貨は一般化されている「富」ではなく、 <u>人を存在としての「富」と考え改めることができ、自分達が自由に、そこに価値基準をうみだせる、という点では良いと感じた。</u> しかし、使い方、つくられ方によっては、 <u>人を洗脳状態にもっていく(まとめの4つ目にあたる)ものでこわいと感じた。</u> ゲームマネーをゲームの中のみでその存在を考えたとき、この良いれいとなると思う。	
		自評	3. 目的との結びつきについて考えられているから。			
		相評	3. 地域通貨の欠点を、それを使っている人民の視点から分析できている。			
		規準反省	4. 5の違いが分かりにくい。分析と自覚の違いとは。			

(筆者作成)

分析(2)において、①の評価は0, 6, 6。事前2では、感覚的に判断していたが、事後1では、国家・政府の価値観や目的を結びつける主体を区別し、自分の語りを構築した。最終1では、多様な価値観やその価値観の影響を自覚し、相対化した。②の評価は6, 6。事後2では、地域

通貨に結びつく、価値観自体を相対化して、説明した。最終2では、地域通貨に結びつく価値観を相対化するだけでなく、自由意志を持つ人間の存在を富として、自分の語りへと再構築した。

分析(3)において、規準反省では規準の違いを明確にする改善について検討した。感想では、「自分の考えの浅はかさを知る機会となってよかった」のように、自分の意見を相対化するだけでなく、批判的な思考を「真の目的や価値観を深く考え知ることができるので、大切に手段として持っておこう」と、より深い学びの必要性として感じている。

学習者Bのように事後・最終アンケートでの評価が同じであっても、事後アンケートの「学習としての評価」活動によって、最終アンケートの回答で、貨幣に結びつく目的や価値観を判断し、学習者自身の語りを丁寧に行えた場合が多い。また、事後アンケートの際に、高い資質を達成できていると、評価活動の効果が高まり、最終アンケートにおいて、学習者自身の語りをさらに深める場合が多い。

(3) 事前・事後よりも最終における探究が顕著である学習者の事例（学習者C、0-0-6）

総合評価が0, 0, 6や1, 1, 5のように、事前・事後アンケートで低評価であったが、最終アンケートで高評価となったような、事後アンケートにおける「学習としての評価」活動により、最終アンケートにおける探究が、顕著である学習者は、7人いた。表18は、評価0, 0, 6となった学習者Cの回答を示したものである。

分析(1)において、事前1は記述なし。評価0。事前2「少なかったら生命を維持できなくなるかもしれないけど、多くてもたくさん使い道があるため困らないから」と感覚的。評価0。総合評価0。事後1「お金が多い方が豊かな生活ができるというのはすり込まれてきただけで気のせいかもしれないと思った」ように、他者の影響を自覚しているが、目的や価値観を明記していない。評価0。事後2「生活的にはではないが、人間的に私達を豊かにしてくれるかもしれない」のように、貨幣を肯定的に評価しているが、感覚的。評価0。総合評価0。一方最終1では、「そもそもそれは、国富や国力を示すために政府などによって仕向けられていたのかもしれないと考えると少し嫌な気がした」のように、国富や国力を示すという目的の段階まで探究している。評価3。最終2「自分や他人のために何かをする」とは、地域通貨の価値観を説明している。そして、「得られるお金というのは生活だけでなく人間の心も豊かにしてくれるものではないかと思った」のように、貨幣の社会的機能に加えて、新しい価値観に基づく語りを探究した。評価6。総合評価6。

分析(2)において、①の評価0, 0, 3。事前2では、感覚的に説明していた。事後1では、他者の影響を自覚しているが、国家の目的や価値観などは、説明できなかった。最終1では、目的の段階まで探究できた。②の評価は0, 6。事後2では、地域通貨を肯定的に判断する根拠・価値観が不明であったが、最終2では、地域通貨の価値観を踏まえて探究できた。

分析(3)において、規準反省では、自分の使用を判断させる規準を検討した。感想では、「自

表18 学習者Cの回答 (0-0-6)

事前		事後		最終		感想
1	(働き) 記述なし (理由) 記述なし					イギリスの金貨とアメリカの紙幣のシステムの違いを考えたことは今までなかったけど、実際にやってみて、特に、影響の大きい貿易商になって違いをしっかりと理解することができたとと思う。お金はよく考えて使いたい。②自分の考えだけでなく、他人の考えも読むことで、
自己評価	0。記述なし。					
2	【存在】多ければ多いほどいい。【理由】少なかったら生命を維持できなくなるかもしれないけど、多くてもたくさん使い道があるため困らないから。	1	<u>確かにまともでも書かれているように、お金が多い方が豊かな生活ができるというのはすり込まれてきただけで気のせいかもしれないと思った。実際に、1万円札自体に1万円の価値はないということなどを考えると不思議で、よりわからなくなってきました。</u>	1	<u>お金とはイギリスの金貨の制度やアメリカの紙幣の制度などさまざまな過程を経てあるもので、普段私達は自分の生活のためにお金を使っているが、そもそもそれは、<u>国富や国力を示すために政府などによって仕向けられていたのかもしれない</u>と考えると少し嫌な気がした。</u>	自分の考えの直した方がよい所や相手の考えから取り入れたいことなどを見つけることができている。③自分の考えだけでなく、他人の考えも読むことで、自分の考えの直した方がよい所や相手の考えから取り入れたいことなどを見つけることができている。④自分の考えだけでなく、他人の考えも読むことで、自分の考えの直した方がよい所や相手の考えから取り入れたいことなどを見つけることができる。⑤自分の考えの直した方がよい所や相手の考えから取り入れたいことなどを見つけることができる。⑥自分の考えの直した方がよい所や相手の考えから取り入れたいことなどを見つけることができる。
自己評価	2。お金を多く持っているときとそうでないときの差を書いているから。	自己評価	3。お金は使うものだとして認識させられていると言うことが書いてある。			
		相互評価	3。国も目的が結びついていることを書いているから。			
		2	<u>地域通貨の使用は、生活的にはないが、人間的に私達を豊かにしてくれるかもしれないと思った。</u>	2	<u>普段のお金とは違い、自分や他人のために何かをすることで得られる<u>お金というものは生活だけでなく人間の心も豊かにしてくれるものではないか</u>と思った。</u>	
		自評	0。どれにもあてはまらないと思った。			
		相評	0。どれにもあてはまらないから。			
規準反省	自分が使うときは、どのような立場で使うかというのをたす。					

(筆者作成)

分の考えの直した方がよい所や相手の考えから取り入れたいことなどを見つけることができる。③自分の考えだけでなく、他人の考えも読むことで、自分の考えの直した方がよい所や相手の考えから取り入れたいことなどを見つけることができる。④自分の考えの直した方がよい所や相手の考えから取り入れたいことなどを見つけることができる。⑤自分の考えの直した方がよい所や相手の考えから取り入れたいことなどを見つけることができる。⑥自分の考えの直した方がよい所や相手の考えから取り入れたいことなどを見つけることができる。

学習者Cのように、最終アンケートで大きく資質を探究した学習者は、事後アンケートでの記述の仕方が、不慣れなため、十分に自分の語りを、構築できなかった場合が多い。特に、事後アンケートで評価0の場合、貨幣を通じた国家の影響を探究できていても、国家の目的や価値観に基づいて、説明できなかった学習者が多かった。学習者Cは、その中の一人である。評価活動によって、評価規準に基づく自己・相互評価、評価規準そのものの検討により、評価規準に着目し、記述において、重要な観点を理解した。そのため、最終アンケートでは、高い資質を探究できたと、考えられる。

(4) 十分に探究できなかった学習者の事例 (学習者D, 1-0-0)

総合評価が1, 0, 0や1, 1, 1のように、低評価となり、十分に探究できなかった学習者は、4人いた。表19は、評価1, 0, 0となった、学習者Dの回答を示した。

分析 (1) では、事前1「ものの価値の規準をつくる働き」のように、対象となるものの価値を示すものとして、説明している。評価1。事前2「物」で欲しいものは、お金があれば手に

表19 学習者Dの回答 (1-0-0)

事前		事後		最終		感想
1	(働きの)ものの価値の基準をつくる働き。(理由)ものを買うとき、今の時代は絶対と いっていい程、ほとんどのお店がお金を使用しているから。お金を使うときは、何か を買うときか何かサービスを受け取る時しかないから。					①普段の授業と違いゲーム感覚で体験することで、より身にしみこみやすい授業だった。楽しかったけど少しルール説明が足りなかったです。すみません。 ②自分では思いもしなかった発想やもの捉え方がでてきて、すごく新鮮ですごく勉強になった。
自己評価	1。「対象となる物の価値の基準」としてお金を扱っているから。					
2	【存在】欲しいものを手に入れられるもの。【理由】「物」で欲しいものは、お金があれば手に入るから。	1	良いことも、悪い事も起こりうる事の発端	1	お金は、その時代の政治の仕組みや経済状況を映す鏡のようなものだと思う。まとめの項目1について確かにお金は私達が語るものでもあるが、語るだけで実行に移さなければ、手にも入らないし、減りもしないので、お金の存在意義がうすれてしまうのではないかと思う。	
自己評価	1。「物と物とを交換できるもの」として扱っているから。お金を。	自己評価	2. まとめて書きすぎている。「事の発端」＝「お金について語る」、お金について語る事で解決する問題に触れているから。			
		相互評価	2. 良いことが国の豊かさで、悪い事が貧富の差のことを指しているのかなと思ったから。			
		2	確かに <u>お金の行き来が活発になって経済活動は促進させられるかもしれないが、格差も生まれそう(根拠はないけど)</u>	2	確かに、 <u>国や地域同士で通貨が同じだったら、その通貨の流通も増え経済活動も盛んになるかもしれないが、そうしたら、その国や地域間での貧富の差が拡大してしまう恐れもある</u> ので、 <u>1長1短ある</u> など思った。	
		自評	2. 貧富の差について触れているから。			
		相評	2. 格差という言葉を用いているから。			
		規準反省	3と4と5が少し混ざる。「結びつけている」と「影響をうけている」の言葉(意味)の違いが少しわかりづらい。			

(筆者作成)

入るから」と、貨幣の交換機能について、説明している。評価1。総合評価1。事後1「良いことも、悪い事も起こりうる事の発端」は、学習内容に基づいていない。評価0。事後2「確かにお金の行き来が活発になって経済活動は促進させられるかもしれないが、格差も生まれそう(根拠はないけど)」は、シミュレーション活動における体験に基づいているにすぎず、貨幣に結びつく目的や価値観について、探究していない。評価0。総合評価0。最終1「お金は、その時代の政治の仕組みや経済状況を映す鏡のようなものだと思う」では、貨幣が政治・経済の特徴を示すという常識的な説明に留まり、貨幣に結びつく目的、価値観について探究していない。評価0。最終2「確かに、国や地域同士で通貨が同じだったら、その通貨の流通も増え経済活動も盛んになるかもしれない」のように、貨幣の経済的影響を常識的に説明しているが、貨幣

に結びつく目的、価値観について探究してはいない。「その国や地域間での貧富の差が拡大してしまう恐れもあるので、1長1短あるなと思った」は、貧富の差という言葉があるが、貨幣が貧富の差を表すという機能を、説明したわけではない。評価0。総合評価0。

分析(2)では、①の評価は1, 0, 0。事前1は、貨幣の交換機能に基づいて説明したが、事後2と最終2では、貨幣の機能や価値観について探究できず、貨幣が政治・経済の特徴を示すことについて、説明した。②の評価は0, 0。事後2では、シミュレーションの体験的な説明となった。最終2では、地域通貨使用の主旨を誤解して理解している。また、貨幣の使用の是非を、流通や経済活動などの社会認識の視点で判断していた。

分析(3)において、規準反省では、3・4・5各段階の内容が、混在していると考えている。評価規準を、理解できていない可能性が高い。感想では他者の新しい発想に触れることで、「すごく新鮮ですごく勉強になった」のように、学ぶ意義を感じていた。

学習者Dのように、資質の探究が不十分である場合、貨幣は語るものであり、語る主体の目的や価値観が結びつくという、語用論的な認識が成長せず、貨幣は市場で売買する際に使用されるもの、経済活動で用いられるものと、常識的な理解に留まることが多い。事後アンケートにおける評価活動も効果を上げていない。評価活動の中心である、評価規準そのものも理解できていないと考えられる。しかし、評価活動にともなう他者との対話による、学ぶ姿勢への影響は大きかった。

3. 本章のまとめ

本單元における、「学習としての評価」と語用論的資質育成の関係について、次のことが分かった。第1に、大部分の生徒(34人)が事後アンケートの「学習としての評価」活動によって貨幣に関する語用論的資質を成長させた。資質の段階が高い学習者ほど評価活動により自分の語りを向上させたり、精緻化させたりしている。第2に、事後・最終アンケートの評価に変化がない場合でも、評価規準を活用することで、より丁寧に貨幣の使用について語っている。第3に、学習内容・経験を整理することが苦手な場合でも、評価規準に基づくことで、貨幣の語りを創り出せる。第4に、学習内容と共に評価規準について理解が不十分であると、資質向上の点では、評価活動の効果は小さい。第5に、学習者はどの段階に位置付いていても、他者との評価活動に肯定的である。自分の考えを見直したり、新しい視点を構成したりと、深く学ぶ姿勢を創り出している。

まとめると、「学習としての評価」は、効果的に語用論的資質を成長させる。特に、評価規準に基づく評価活動への参加が、学習者の学習内容・経験を意識化する上で、重要な働きをしている。また、資質成長だけでなく、相互の語りを修正・成長させる自己-他者の肯定的関係を、構築する。

V 研究の小括

本研究では、次の点を明らかにした。

第1に、「学習としての評価」は、評価活動の参加を保障することで、学習者が学習内容・経験を意識化（メタ認知化）する。そして、自己との内省や他者との対話を促し、相互の語りを修正・成長させる自己－他者の関係を構築する。そのため、対話を行う語用論的資質を育成する歴史授業においては、学習活動として組織できる。

第2に、「学習としての評価」は、評価規準に基づく自己評価や相互評価、評価規準の検討（改善や新基準の作成）という、評価活動（学習活動）で構成できる。

第3に、学習者は「学習としての評価」に参加することで、評価規準に着目する。その規準を活用・構成・再構成することを通して、語用論的資質を向上させる。そのため、評価規準を理解していることが重要となる。

以上のことから、本研究の意義は、語用論的資質を育成する歴史授業において、「学習としての評価」を学習活動に積極的に位置付けることで、学習者が自己と他者を区別する自己から、他者の存在を積極的肯定的に含みこむ自己へと転換し、他者と共に資質を修正し向上させるという市民的資質を育成できることを、事例的ではあるが、明らかにしたことである。

参考文献

- 得居千照「哲学対話における「学習としての評価」の役割—高等専門学校「対話としての哲学・倫理入門」「現代社会論」の実践分析を手がかりとして—」日本社会科教育学会『社会科教育研究』No. 132, 2017年, pp. 27-39.
- 二宮衆一「第2章 教育評価の機能」西岡加名恵・石井英真・田中耕治（編）『新しい教育評価入門—人を育てる評価のために』有斐閣, 2015年, pp. 51-75.
- 宮本英征「語用論的資質を育成する歴史授業—世界史単元「言説『貨幣』を考える」を事例にして—」日本社会科教育学会『社会科教育研究』No. 134, 2018年, pp. 23-36.

“Evaluation as Learning” in History Learning to Foster Pragmatic Qualities: A Case Study of a World History Unit Approach “Thinking about Money as a Statement”

Hideyuki MIYAMOTO

Abstract

The purpose of this research is to clarify that “evaluation as learning” is effective in developing learner qualities in history learning that fosters pragmatic qualities. Therefore, the relationship between the structure of exploring the pragmatic qualities of the world history unit “Thinking about Money” and the “evaluation as learning” and the evaluation strategy were examined, and the qualitative growth of students’ qualities was examined. The significance of this research is that positioning “evaluation as learning” in the learning content not only raises awareness of the learning content and experience, but also promotes self-involvement in the positive and positive inclusion of the existence of others, It is an example, but clear, that we can transform ourselves into a self that modifies and grows our qualities.

Keywords: evaluation as learning, evaluation for learning, pragmatic qualities, history education, world history education